

犬の生活

小山清

青空文庫

私はその犬を飼うことにした。「神様が私にあなたのもとへゆけと告げたのです。あなたに見放されたら、私は途方に暮れてしまいます。」とその眼が訴えているように思われたので。またその眼はこうも云^いっているように思われた。「あなたはいつぞや石をぶつける子供達から、私を助けて下さったではないですか。」私には覚えのないことだが、しかし全然あり得ないことではない。公園のベンチの上で午睡^{ごすい}の夢からさめたら、私の顔のさきにその犬の顔があつた。私が顔を覆うていた本はベンチの下に落ちていた。あるいは犬がその鼻づらで本をこづいて、その気配に私は眼をさましたのかも知れない。私が掌^{てのひら}を出すと、犬はその前肢を

あずけた。私が帰りかけると、後を慕ってきたのである。

私はその犬を飼おうと思ったが、けれども、自分は軽はずみなことをしているのではないかという気もした。けれどもまた考えしてみるに、私の過去は軽はずみの連続のようなもので、もはやそのことでは私は自分自身を深く咎め^{とが}だてする気にもなれないのである。私はやはりいつもの伝でやることにした。私は犬の顔を眺めながら、「私さえ保護者らしい気持を失わないならば、お互いがお互いを重荷に感ずるようなことはまずないだろう。」と思った。自信のあるような、ないような気持であつた。私はこれまで男の友達とは幾度か一緒に暮らしたことがあるが、いつも気まずい羽目になってしまったのである。

私はこの武蔵野市に移ってきってから、三年ほどになる。私はあの家の離れを借りて暮らしている。母屋おもやの主人というのは年寄の後家さんである。気丈な人で、独りで自炊をして暮らしている。ひとり娘が嫁いだ先には大きい孫があつて、たまに孫たちが遊びにくる。

私は散歩の途中、偶然この家の前を通りかかつて、軒さきに「貸間あり」の札がさがっているのを見かけ、檜葉ひばの生垣いけがきにかこわれているこの家のたたずまいになんとなく気を惹ひかれたのである。私は案外簡単に借りることが出来た。ひとつは私が勤人ではなく、一日中家にいる商売なので、用心がいいと思つたのかも知れない。この離れには、私の前には、この近く的美術学校に通つ

ていた画学生がいたそうである。

私が借りている離れには土間がある。犬を飼おうと思ったとき、その土間のことが私の念頭に浮かんた。犬は土間に這入ると、喉^{のど}が乾いていたのだろう、そこにあつたバケツの中の水をぴしゃぴしゃ音をさせてさもうまそうに呑んだ。私が上^{あがり}框^{がまち}に腰を下ろして口笛を鳴らすと、犬は私の足許に寄つてきて、いかにも満足そうに「ワンワン。」と二声吠えた。その様子は、「私達はもう他人じゃありませんね。」と云っているように見えた。そのときになって私は、犬を飼うには、私の一存だけではすまないことになり気がついた。母屋の年寄の思惑が気になったのである。

私は犬をつれて、お婆さんのいる座敷の縁さきへ行つた。お婆

さんは長火鉢のわきに坐つて小さなお膳に向い、独りで花骨牌はなガルタを並べていたが、こちらに気づくと、

「おや、どこの犬ですか。」

「迷い犬らしい。」私は弁解するように云つた。「公園から僕についてきたんです。」

お婆さんは立つて縁さきに来た。

「捨犬でしょう。」お婆さんは一寸調べるように見ていたが、
「牝めすですね。」

そう云われて、私は自分の迂闊うかつさにはじめて気がついた。私は自分で飼う気でいながら、その犬が牝であるか、牝であるかをまづ確かめることさえ忘れていたのである。私は軽はずみの例に洩もれ

ず、少しくとりのぼせていたのである。よく見ると、犬の頸くびには最近まで首輪をはめていた形跡がある。またその胸部に見える乳房は最前から眼に入っていたのだが、私はついいうっかりしていたのである。お婆さんの一言は、犬の姿態に感ぜられる、牝らしい優しさを私に気づかせた。

犬は沓脱くつぬぎ石のわきにうずくまって、こちらの機嫌を窺うかがうように薄眼をあけたりしている。

「野良犬ではないようだ。」

「ええ。この辺の犬じゃありませんね。自動車にでも乗せてきて捨てて行つたのでしょうか。軀からだも汚れていないし、そんなに饑ひもじがっているようでもないですね。」

お婆さんが犬に対してあまり冷淡な素振りも見せないのも、私は少しほっとした。お婆さんはなお見しらべるような眼つきをしていたが、ふいに声をあげた。

「こりやあ、仔もちだ。この犬は仔もちですよ。」

「え？」

「どうも妊娠しているようですよ。お乳の工合からなから。」

「へえ、それはまた。」

「子どもが出来たので、飼主が捨てたのでしよう。たいした犬じゃないししますしね。」

私は少しく興ざめた。にわかに犬が不身持の女かなぞのように見えた。かりそめの出来心からとんだ厄やっかい介ものをしよい込んだ

ような気がした。お婆さんは犬の額に掌をのせて、無言のまま、やさしく撫でた。たいした犬ではないと云っておきながら、不憫ふびんがつているその様子に、私は心を惹かれた。人間が抱く感情の中で、やはり寛容は非難に優るものである。ひとを非難するということは、それがどんなに正当に見えるような場合でも、むなしい仇矢あだやを放つようなものである。お婆さんの態度には、いたずら娘いたわを労いたわっている母親のようなやさしさが感ぜられた。また人間と犬との違いはあっても、女は女同士といったようなところもあつた。犬は眼を細くして、お婆さんの愛撫に応えている。そのほつとしているような様子を見ると、私もまた心をそそられた。

「犬は好きですか。」

とお婆さんが私に向つて云つた。私は一寸返答に困つた。女は好きかと訊かれても、やはり私は同じように困惑するだろう。

「嫌いじゃありません。まだ一度も犬を飼つたことはないんです。」

「可愛いもんですよ。亡くなつた連合つれあいが犬や小鳥の好きなたちでしてね。何度か飼つたことがございますよ。」

お婆さんの声音こわねには、亡くなつた人を懐しんでいる響があつた。

お婆さんの連合は、もう大分まえに、壮年のころに亡くなつたようである。飾職だつたという。お婆さんの部屋の長押ながしにはその人の肖像が額かにして懸かけてある。私は一言か二言の中にその人の倅おもかげや生涯ほうふつが彷彿ほうふつとしてくるような言葉をきくのが好きだ。たとえ

ば電車の中などで、乗客のこんな話を耳にすることがある。「あいつも死んだね。」「いい気前の男だったがね。」「釣り好きだったね。」「そんななんでもない会話にいわば浮世の味が感ぜられる。そんなとき私はなにか胸の悶えつかでも下りるような気がして、わけもなくこの世の中が有難味のあるものに思えてくるのである。お婆さんや犬を前にして、そのときも私は世の中に対する張合のようなものを感じた。私は云い出す折を得たような気がして、「どんなもんでしょうか。出来れば飼ってやりたいと思っているんですが。」

「そうですね。」「お婆さんは自分の胸に問うように、「せめてお産がすむまでもね。なに、それほど世話も焼けませんよ。」

私はほつとした。このように容易くお婆さんの許諾が得られようとは私は思っていなかった。

「この犬は二歳位でしょう。初産ういざんでしょうよ。」

とお婆さんは云った。その初産という言葉が私の心にしみた。

私は犬をメリーという名で呼ぶことにした、メリーは、お婆さんの云うように、たいした犬ではない。ありふれた雑種である。白と黒の斑ぶちで、白地に、雲の形をしたようなのや、島の形をしたような模様がついているのである。人間ならば、中肉中背とでも云うところだろうか。どちらかと云えば、大柄の方である。被毛ひもうは長い方で、色艶はそんなに悪くない。軀からだつきは様子のいい方で

はないが、さりとて不恰好というわけでもない。器量だつてまんざらでもない。美人ではないが、よく見ると、可愛い顔をしている。なによりも、高慢こうまんらしい感じがしないのがいい。眼がいいのだ。メリーの眼は、ほんとにいい。眼は心の窓というが、メリーの眼を覗くと、メリーが善良な庶民の心を持っている犬だということが、よくわかる。そして、こういう動物達の方が、人間よりも、神様のそば近くに暮らしているということが、よくわかる。アンリー・ルツソーが在世ならば、彼にメリーの肖像画を描かせたい。ルツソーならば、メリーのいのちをそのままに画布の上に写すことが出来るだろう。私はまた、メリーの声が好きだ。どんな吠え声にも、感情が籠こもっていて、お義理で口をきいているよう

なところは、少しもない。また、その発声の源にあるものは愛情と善意だけなので、それがこちらの耳障りになるようなことは、少しもない。私が「メリー。」と呼ぶとメリーはすぐ私の正面にきて、私の顔を仰ぎ、尾を振りながら、「ワン、ワン。」と吠え（ほ）る。その様子は、「私はあなたが、私を呼んでいるのだ」ということをよく知っています。」と云っているようにも見え、また、

「なんの御用ですか。」と云っているようにも見える。ふとして私が、メリーは前の飼主のことを思い出しているのではなかろうかと僻んだことを考えたりしていると、メリーは私の気持を察したかのように私に戯れ（たわむ）かかり、自分はいまの瞬間を楽しむことでいっぱい（い）で他意はないのだというようなしなをして、私の気まず

さを救ってくれる。私はこれまで誰からも、こんなふう^こに媚びられたことはなかった。メリーは前の飼主のもとでは、なんという名で呼ばれていたかは知らないが、いまはもう全く、私のメリー以外のものではない。前の飼主にしてからが、あるいはメリーを捨てたのだとしても、決して薄情な人ではなかったに違いない。やむにやまれぬ事情があつたのであろう。その一家には、とくにメリーと仲良しの坊やがいたかも知れない。メリーを見ると、そんな想像が湧いてくるのだ。

こないだ私は手帳にこんなことを書きつけたばかりだったのだ
が。

「……私のもとには殆ど訪問客はない。私もまた人をたずねない。私は生れつき引つ込み思案な性分なので、独りでいる方が勝手なのである。たまに人とお喋りしゃべをすると、こなれの悪い食物を食った後のように、しばらくは気色が悪い。『退屈して困る』ということをよく聞か、私の日常などは凡そ退屈なものであるが、けれども私はそれだからといって、べつに困りはしない。私にとつては、退屈は困るというようなものではない。私にとつては『退屈』は気心の合った友達のようなもので、私は誰と共にいるよりも、『退屈』と共にいて、無聊ぶりようを託かこっている方がいい。いわば私は退屈を楽しんでいるのである。思うに、徒然つれづれというものも、幸福感の一種なのかも知れない。」

ところで、メリーと共に暮らすようになってから、私の日常も多少あらたまってきた。私は無聊を託つてばかりもいられなくなった。まず私はこれまでのように朝寝坊が出来なくなった。メリーのために朝飯の支度をしなければならぬので。私は自分の軀が寢床から、こんなにも思い切りよく離れられるものとは、思つていなかった。また早起きの味がこんなにも爽快そうかいなものとは知らなかった。焜炉こんろに火をおこし、メリーと自分のために野菜を煮るのだが、私の心はまるで幼妻のそれのようにいそいそしているのだ。お婆さんは「世話は焼けない。」と云ったけれど、それは全くそうなのだ。メリーのために何かをしてやるということとは、私にとっては少しも厄介ではなかったから。メリーのために手足

を働かすたびに、私は自分の心が活潑と鷹揚おうようの度合を増していくような気がした。

私ははじめ土間の隅に藁わらを敷いて、そこにメリーを寝かしたが、その後小屋をつくった。私は果物屋から林檎箱りんごをいくつか譲ってもらって、それを材料にして小屋をこしらえた。私の上衣やズボンなども、軀よりは大きめの少しだぶだぶしているようなのが好きだ。私にとっては、なんによらず野暮やぼという様式位、居心地のいいものはない。私はメリーのためにも、少し大きめの小屋をこしらえた。やがては、仔どもも産れることだし。私は小屋の作製にまる二日を費した。随分不恰好ぶかつこうな小屋が出来上った。それはいわば大野暮とでも云うべき代物しろものであつた。もともと私は手工

は幼稚園時代から苦が手だったのだ。私は小屋を離れの戸口の前
の柿の木の下に置いた。それでもよくしたもので、メリーは家畜
の習性からか、そこをはじめから自分の住居と承知しているよう
な顔つきで、いそいそと小屋の中に這入り込んだ。その満足そう
にしている様子を見て、私はメリーにすまないような気がしたが、
それでも嬉しくないことはなかった。私は慣れぬ仕事で掌にでき
た肉刺まめをなでながら、自分にもなにかがつかれるという喜びをか
すかに感じた。それは遠いところからきた暗示のように、かすか
に私に囁きかけた。なにかがつかれる。愛することだって、出来
ない限りでもない。

私はメリーを獣医の許に連れて行つた。私の家から銭湯へゆく

途中に犬猫病院がある。私はそれまでべつに注意もしなかったその看板が気になるようになり、そのうちいちどメリーを診察してもらった方がいいのではないかと思った。メリーはただの軀ではないのだから。私はメリーには出来るだけのことをしてやりたいと思った。お婆さんは首をかしげて、「そうねえ。それは診^みてもらっておくに越したことはないでしょう。」と云った。お婆さんの眼の表情は私に向って、「あんたも案外愛犬家の素質があるようですな。」と云っているように見えた。

獣医は柔和な顔をした青年紳士であつた。診察室の壁には、ルツソーの「幸福なる四部合奏」の複製がかかっていた。私はおやおやと思った。

「どうなさいました。」

「いいえ。健康診断をお願いしたいのです。」

獣医は台の上にメリーをお坐りさせて、物慣れた手つきで、聴診器をメリーの軀にあてた。その間、メリーは全く従順にしていた。

「妊娠をしていますね。」

「はい。どんな工合でしょうか。」

獣医は黙ったまま、こんどはメリーの後肢の内股のあたりを握って、懐中時計のおもてを見つめ、メリーの脈みやくはく搏をを数えた。

人間も犬も変りはない、型どおりのものだと思しながら、診察の有様を見ていると、獣医が体温器をとりあげて水銀部にワゼリン

をぬるとひとしく、それまでそばで黙って見ていた助手が、いきなりメリーの軀をおさえた。獣医は片手でメリーの尾をもちあげて、体温器をメリーの肛門にすかにさし込んだ。瞬間メリーはじめて少しく抵抗を試みたが、すぐまたおとなしくなった。私にはその三、四分の間が随分ながく感ぜられた。私はメリーの顔と獣医の顔とを交互に見ながら、胸が熱くなつた。神様は依怙えこひ贖いなしに人間の一人一人に、その素質にふさわしい使命を授けてくれるのだという気がしたのである。獣医は体温器を抜きとって、見しらべてから助手の手に渡した。

「異状はないようです。お産までには一月ありますね。」

私はなにやらほっとすると共に、その一月という期間が長いよ

うにもまた短いようにも感ぜられ、職業柄、締切日を宣告されたような氣もした。締切日は私という愚かな鼠が落ちる陷^{かんせい}穽^{せい}のようなものであつた。私はいつでも、まだ二十日もある、十日あると思ひながら愚^ぐ図^ず愚^ぐ図^ずしているうちに、ずるずると土壇場^{どたんば}に追ひ込まれてしまうのがおきまりなのであつた。メリーの生理と私の用意がうまく歩調を合わせてくれればいいがと思つた。「まさかのときは神様が助けて下さるだろう。」私は意志薄弱者らしく心の中で呟^{つぶや}いた。

私はメリーに代つて、獣医から妊娠中の心得を聞いた。朝夕に適度な運動をさせてやるほかは、なるべく繋^{つな}いでおくこと。よその犬と喧嘩^{けんか}をさせないようにすること。流産をする心配があるか

ら。人間と同じように母犬もおなかですくものだから、じょうじよく滋養食をふだんよりは余計にやるようにすること。そのほか色々聞いた。獣医はメリーが捨犬でこないだ私に拾われたばかりだと聞くと、念のため狂犬病の予防注射をして置こう、飼犬の登録申請をする場合にも、その証明書が必要でもあるからと云った。

「予防注射などをして、大丈夫でしょうか。」

と私は訊いた。獣医はわからぬような表情をした。

「おなかの仔どもにさしつかえはないでしょうか。」

獣医はいい眼つきで私を眺め、はがん破顔一笑した。

「心配はありません。」

獣医はまた助手に手伝わせて、メリーの頸に注射をした。メリ

ーは注射針を刺された瞬間、「キャン。」と一声悲鳴をあげたが、あとは薬液やくえきを注入しおわるまでじっとしていた。獣医は注射をした跡をアルコールをしめした綿でかるく摩擦まさつした。メリーもようやく自分が解放されたことを感じたらしく、私の顔を見上げて尾をはげしく振った。私は可憐かれんな気がして、メリーの頸を抱きその額をなでた。人前ではあつたが、私はそうせずにはいられなかった。

証明書を書くだんになって、獣医は私をかえりみて、

「名前は？」

「メリー。」

私の頬には血がのぼり、私は自分の声音にメリーに対する自分

の気持ちを確かめるような思いをさえ味わった。

帰りぎわに、私は壁のうえの「幸福なる四部合奏」の絵の中にいる犬を指さし、獣医に訊いてみた。

「この犬は何種でしょうか。」

獣医は他意のない微笑を見せた。

「さあ。テリアの一種でしょう。」

私はこの絵が欲しかったのだ。離れの壁にこの絵をかけたいと思つた。けれども、いきなり無心も出来なかった。

家に帰って、私はメリーの小屋のわきにある柿の木にメリーを繋いだ。ことしは柿の当り年らしく、柿の木の梢には、枝もたわわに実が成っている。この実が色づく頃には、メリーは仔どもを

産むのだと私は思った。

私は市役所へ行つて飼育の登録申請をし、また保健所へ行つて、獣医の証明書を提出し、両方から一枚ずつ鑑札かんさつをもらった。鑑札を渡してくれるとき、係りの女の子は私に向い、この鑑札を必ず首輪に付けて置くようにと注意した。私はまだメリーに首輪を買つてやつてはいなかった。

私は駅前の繁華街にある刃物屋で、メリーのために首輪と鎖を買った。私は首輪に私とメリーの名前を彫ほらせた。私は奮発して、首輪も鎖も上等のを買った。私にはむかしから羊羹ようかんや沢庵たくあんをうすめに切るくせがある。私はこの際自分のそういう性質を改良

すべきだと思った。かえりに私は牛乳屋に寄り、毎日一本宛配達してもらうことにした。家に帰って私はメリーの頸に首輪をはめた。さあ、これで私達の間柄は、神様の前にも世間の前にも正當なものになったのだ。

私ははじめ几帳面にメリーを鎖に繋いだが、その後は散歩に連れてゆくときのほかは、メリーの頸に鎖をつけなかった。メリーは全くわが家に馴染なじんで、ひとりでは外に出かけなかった。私が机に向い本を読んだり、小説を書きあぐんだりしているわきで、メリーは土間に寝そべっていたり、お婆さんのいる座敷の縁先に遠慮なく上りこんで日なたぼっこをしていたり、またお婆さんが庭に丹精して育てている草花のかげで昼寝をむさぼっていたりし

ている。私もメリーと共に暮らすようになってからは、家に落着くようになった。私はそれまでは独り者の気散じで、所在なくなると、ついぶらぶらと散歩にばかり出かけていたのだが。読書に倦^うんで本から眼をあげ、土間にいるメリーと視線があったりすると、私はなんとなく安心して、それこそアット・ホームな気持になる。メリーにしても、同じ思いではないかしら。私はそれをメリーの眼つきに感ずるのだ。

私はメリーが魔法使のお婆さんのために犬に化せられた人間の娘で、やがていつかはその魔法がとけて再びもとの娘の姿にもどるのではないかしらと、そんな阿呆^{あほう}なことを半ば本気で空想したりした。また逆に私の胸の中には魔法によってながい眠りにつか

されている王子がいて、その王子を眠りからさませるためにメリーは私のもとに來たのだと空想したりした。魔法の霧がはれて、自覚していなかったさまざまの可能性が開花する日がきつとくると、私はそんな虫のいいことを思った。

メリーがきてから、母屋のお婆さんと私の仲も親しみを増した。お婆さんは私にとっては、最も身ぢかな隣人でありまた世間であるが、これまで私はそれほど親しくはしていなかった。私は無愛想な口不調法な人間だし、お婆さんもあつさりした人柄だから。

けれども、メリーがきてからは、私の人づき悪さが、メリーのために大分緩和されたような工合になった。私はメリーが私のために、世間に対して執^{とりなし}成をしてくれるような気がする。云いかえ

れば、メリーのなかにある「庶民の心」をとおして、私自身も世間につながる事が出来るのである。

お婆さんも、メリーを可愛がつている。お婆さんはいつも大抵、長火鉢のわきに坐つて、前に小さいお膳を据えて、そのうゑに花骨牌を並べている。年をとつて後光のさしくるような人がいるが、このお婆さんがそうである。お婆さんがめくる骨牌の一枚一枚には、恰も精が入つてゐるかのよう。^{あとか}年寄の渋味というものを、一枚の絵にしたようである。お婆さんは年寄には珍しく愚痴^{ぐち}をこぼさない人なのである。

お婆さんは、こんなふうに云う。

「メリーの相手をしてゐるのが、いちばんいいですよ。ほかのお

お客様とですと、ついひとさまのかげ口をきくようになりましてね。
」

私はお婆さんから、被毛の手入れの仕方を教わった。お婆さんはまずブラシで、メリーの頭から、頸、肩、背、腰、肢あしという順に丹念にマツサージをして、それから金櫛かなぐしで丁寧すに梳いた。

「こうしてやると、毛の色艶がよくなりますし、それに蚤のみしらみや虱みがたからなくなります。」

とお婆さんは云った。その後もお婆さんは私に代って、ときどきメリーの手入れをしてきている。お婆さんに面倒を見てもらっているメリーを見ながら、メリーはべつとして、私自身が不当にめぐまれているように思われ、これでいいのだろうか、なん

だか後めたいような不安な気持ちにおそわれるのであった。

私は路を歩きながら、犬に出逢うと、これまでになく気をつけるようになり、また犬が以前ほど恐くはなくなった。どんなに立派な優美な犬を見ても、私には私のメリーの方がよかった。メリーの顔と姿態はもはや私の心にしみついてしまっていた。人の子の親にとって、わが子の顔が絶対なものであることを、私はメリーをとおして学ぶことが出来た。

そのことを私がお婆さんに告げると、お婆さんは云った。

「それは、あんた、情がうつるといふものですよ。」

私は夜外出するとき、離れの明りを、小さな電球にとりかえて、わざと消さずにおく。メリーはもはや自分の^{ねぐら}の塹にいるが、そこか

ら離れの明りが見える方が、メリーののためにも私のためにもいいような気が私にはするのである。私にとつても真暗にして留守にしてみようよりは、その方がなんだか安心なのである。

私の外出は割引から映画を見るか、呑み屋に寄るか、どちらかである。映画館のくらやみは、私にとつては居心地のいい場所の一つである。人込みの中に紛れ込んで、お互いに邪魔にもならず邪魔にもされずに、共にある一定の時間を過ごすことは、人間という群^{ぐんせい}棲動物にとつては、やはり心やりの一つなのであろう。

映画館に入るのは、映画を見るのが目当ではあるが、けれどもこれが自分ひとりで見ているのだとしたら、すこしも楽しくないであらう。私は画面を見ながら、夢み心地になったり、涙をながし

たりするが、ひとから泣顔を見られる心配がないのがいい。私にとっていちばんいやなことは、ひとから見られることである。ひとから見られていると思うと、私はもうぎくしゃくして、なにをすることも出来なくなってしまうのである。

ときたま呑み屋に行くことも、私にとっては欠くことの出来ない、いわば生活の要素である。呑み屋という場所も、私にとってはそんなに窮屈なところではない。私はひとと話の間のもてない方であるが、そこに酒というものが入れば、またべつである。

私は呑み屋の暖簾のれんをくぐって、隅っこの方で、ちびりちびりやる。

「おや、いらっしやい。久しぶりね。いい人が出来たんじやない

かと思つて心配したわよ。」

「実は出来たんだ。」

「へえ。おどかさないでよ。」

「犬を飼つたんだ。メリーつて云うんだ。」

「牝なのね。じゃ、あんた、この頃犬といふの？」

「犬といふなんて、同棲どうせいしているようなことを云うなよ。もつ

とも、同棲にはちがいないが。そのうち仔どもが産れるよ。」

「なに云つてんのよ。あんた、しつかりしなくちや駄目よ。早く、

おかみさんをもらいなさいよ。」

「おれは正気だよ。もう帰る。」

「里心がついたのね。じゃ、またどうぞ。メリーさんに宜しく。」

千鳥足で帰ってくると、離れの窓に明りのついているのが見える。その明りを見つめているうちに、私はその中にメリーがいるような、また自分がいるような気がしてくるのであった。

私の家の近くに井いの頭公園かしらがある。私は朝と夕方、散歩かたがた、メリーをそこへ運動に連れてゆく。私とメリーがはじめて邂かい逅した場所も、この公園である。

私の家から公園の木立が見え、家の前の小路を抜けると、そこはもう公園である。ここはむかしから、都人の行樂地こうらくちとして有名である。戦争末期から戦後にかけては荒れていたが、いまは風ふう致うちも整って、小綺麗になっている。日曜祭日などは家族づれで賑にぎひがある。

わっているが、ふだんはそれほどでもなく、閑散としている。雨上りの後などに、池畔ちはんをぶらつく気分は悪くない。四季折々で、それぞれ風情があるが、私はとりわけ冬枯れの頃と青葉期が好きだ。紅葉のときも悪くないが。武蔵野市では、この公園の風致を保つために、常住人夫を入れている。

私はメリーの首輪に鎖をつけてそれを握り、メリーをひっぱったり、またメリーにひっぱられたりしながら、池の周囲をひと廻りしてくる。

野口雨情もかつて武蔵野市に住んでいて、この井の頭は雨情が朝夕散歩をしていた処のようである。一昨年の秋だったか、池畔に雨情を偲ぶ碑が建てられた。碑面には雨情の作になる井の頭音

頭の一節が刻んである。

な
鳴いてさわいで

ひ
日の暮れ頃は

よし
葦に行々子

はなりやせぬ

雨情自身の筆蹟だが、一寸判読し難い。その後、碑の傍らに、
文字を明記した表札が立てられた。雨情がこのうたを詠んだのは、
大分むかしのことであろう。いまはよしきりの鳴声もきかれない。
葦も池の輪郭が狭りんかくつて池の水が小さな流れになる、上に井の頭

線の鉄橋が架かかっている辺に、わずかに見られるばかりである。
 晩年の春だったか、池の中ほどにある橋が改築されて、七井なないば
 橋しと呼ばれるようになった。橋のたもとは、こんな表札が立
 てられた。

「この池の水は大昔から飲料水、田用水に利用されています。特
 に徳川初期、神田上水が江戸の町民に使われ出すと、その水源と
 して名高くなりました。後玉川上水が開かれると、その溜池ためいけに
 もなったが、今は東京都水道の補助水になることもあります。徳
 川三代將軍家光の牟礼むれ野田のかりの時、御殿山に休息して池の泉かに渴かつ
 を医いしてから、弁財天べんざいてんの堂宇どううも立派にされました。池の中の七
 箇所から清水が湧ひでりいて旱の時も涸かれることがないので、『七井なないの』

池』^{いけ}といひます（江戸名所図絵）。また『神箭の水』^{かみや}ともいひますが（新編武蔵風土記稿）これは池畔から石^{いし}鑕^{やじり}が沢山出たからでしょう。土地の人は『井の頭池』といひます（庶民史料）。この橋は、池の名の一つをとつて七井橋といひます。」

この辺はむかしは將軍家の鷹狩^{たかがり}の場所だつたようである。池の中の七箇所から清水が湧いたというが、いまは大分減つたにちがいない。それでも水量はゆたかで、水の色も澄んでゐる。

この池には浮藻が簇^{ぞく}生^{せい}している。その繁殖力は相当なものらしく、池に舟を浮かべて人夫が藻を除去する作業をしているのをよく見かける。雨情の碑のあるあたりの岸に、引上げられた藻が積んであつて、そのそばを通ると、藻の匂いが鼻を刺戟^{しげき}する。私

はことしはじめて浮藻の花を見た。私ははじめそれを季節ときならぬ桜の花びらが、水面に散り敷いているのかと錯覚した。

池にはまた鴝にょがいる。可愛い鳥である。小粒で臆病気で、人の気配がすると、すぐ水にもぐる。キュルルルルルとけたたましい鳴声を立てて、水面を滑走する。一羽でいることは殆どない。いつも二羽連れ立っている。どちらがどちらとも判別しないが、雌雄しゆうなのかも知れない。私は鴝の浮巢うそうというのを見たいと思っているが、まだお目にかからない。

メリーは私と連れ立って散歩するのが好きらしい。鼻づらで地面をかぐようにしながら、嬉々としてゆく。池畔をめぐりながらメリーは、藻の匂いに鼻をくんくんいわせたり、鴝の鳴声に肝を

消したような顔つきをする。池をひとめぐりすると、私は公園の西の端^{いず}れのいぬしでの木立のある丘にゆき、そこにあるベンチに腰かけて休み、メリーの首輪から鎖をはずしてやる。そして私の姿が見える範囲内でメリーをひとり勝手に遊ばせてやる。

私はひごろからこの場所が好きなのである。私は都会育ちで木や草には馴染みがうすく、とんと疎^{うと}い方なのだが、いつかいぬしでの樹に親しみを感じるようになった。その暗灰色の樹の肌や、丈高く細長い伸びようをしている幹の姿態を見ると、なにかの動物にでも接しているような親しみが湧く。いぬしでの冬^{ふゆ}木立^{こだち}はよかった。裸になった梢^{こずえ}の発揮する生氣はなんとも云えなかった。また、その梢に新芽が萌^もえだしたときの初々しさといったら、な

かった。青葉の頃、ベンチに腰かけて上を仰ぐと、私の頭上高く、緑の天蓋^{てんがい}が覆いかぶさっていて、私はうつとりとしていい気分になるのであった。メリーをはじめて見たときも、私はベンチに仰向けに寝ころんで梢を仰ぎ、いつか夢路に入って、眼がさめてメリーの顔を見て、私ははじめそれをまだ夢のつづきのように思っていたのだったが。

その日の夕方、私はいつものようにメリーを連れて池をひとめぐりし、いぬしでの木立のある丘にきて、メリーを解放し、ベンチに腰をおろしてぼんやりしていた。私の胸の中に幽閉^{ゆうへい}されている眠れる王子は、永遠に目ざめるときが来ないのではなからうかと、私はそんなことをぼんやり考えていたのである。すると不

意に「キャン、キャン。」というただならぬメリーの悲鳴がきこえた。びつくりして見ると、一匹のずうたい図体の大きな赤毛の犬が、逃げるメリーを追いまわしているのである。私は肝をつぶして、その場につけ、メリーをうしろにかば庇つて、ぐつと赤毛の犬を睨にらみつけた。一瞬、私とそやつの目が噛みあつたが、そのとき私はぞつとするものを感じた。赤毛の犬はいきなり私を目がけて飛びかかつてきたのである。私は自分の軀に赤犬がぶつかるのを感じ、はずそうとして思わずそこに尻しりもち餅をついた。私はしまったと思い、そのとき脱げた下駄をつかむと、無我夢中に横に払った。手てごた応え充分であつた。私は赤犬の横腹をいやというほどなぐ擲りつけたらしかった。案ずるほどのこともなかった。赤犬は「キャン。」

と一声悲鳴をあげると、後をも見ずに逃げ去った。私はほっとした。やれやれ。見るとメリーは気づかわしように私を見守っている。いい塩梅あんばいにメリーは恙つつがなかった。気がついてみると、私は負傷をしていた。右掌の小指の下のところにくすぐ歯型がついて紫色になっていた。赤犬は狂犬ではないだろうか。そうだとすると、ことだと思った。それと同時にメリーの軀のことが気になった。いまのショックはメリーのおなかの中の仔どもに悪い影響を及ぼしはしないだろうか。若しかしたら、流産しはしないだろうか。黒雲がもくもくと立ちこめ、前途が真暗になったような気がした。私はその足で獣医のもとに行った。

獣医は私の話をきき、一応メリーの軀を診察したが、異状はな

いと云った。私の負傷の方はてんで問題にもしなかった。それはかすり傷にはちがひなかった。それでも獣医は私の気を休めるように、傷に薬をつけ繃^{ほうたい}帯をまいてくれた。赤犬は狂犬ではないだろうと獣医は云った。

「狂犬でなくとも、ひとを噛むものでしょうか。」

「噛みますとも。恐怖から。憎悪から。嫉妬から、愛情から。」

いやに人間臭いことを云うなど私は思った。横眼でれいの「幸福なる四部合奏」の絵を見ながら。

その夜私は夢を見た。

……私が外出から帰ってくると、メリーの小屋の前に、赤犬が立ちはだかっているではないか。見ると、赤犬は私がメリーのた

めに用意しておいた、肉と野菜のまぜめしをがつつ頼張^{ほおば}っている。メリーはと見れば、小屋の奥の方に小さくなっている様子である。私は足音あらく赤犬のそばにつめより、「こら。」と一^{いっか}喝^っをくらわした。ふしぎなことに、私の口からは「ワン。」という声がもれた。私は自分がいつのまにか一匹の白犬になっていることを確認した。赤犬は私の方をふりむき、私達は互いに睨みあった。私は赤犬の眼を見つめているうちに、なんだか見覚えがあるなと思った。そう思うと同時に、眼前の赤犬の顔のなかから、私の小学校時代のある同級生の顔が二重写しのように見えてきた。あいつだ、と私は唸^{うな}った。（あいつ。それは私の小学校時代のあの同級生である、五年生のときであつた。ある日、私が教室でそ

の日文房具屋で買った新しい雑記帳を机から取り出して、いそいそとひろげてみると、自分ではまだなに一つ書いた覚えのないその真新しい頁のはじめに、鉛筆でまるで蜘蛛の巣を見るようにいたずら描きがしてあった。またある日、私は母の手縫いの仕立てろしの着物をきて学校へ行つたが、家に帰つてきて見ると、その着物の背なかにガムがへばりついていた。またある日、学校でおひる時間に、私が弁当箱をあけてみたら、おかずの玉子焼を誰かが食い齧^{かじ}つた形跡があつた。これらの犯人が誰であるか、私にはうすうす見当がついていた。それは教室で私のすぐうしろの席にいる生徒であつた。その生徒はある金持の^{せがれ}倅であつた。彼は私の顔を横眼で見ながら、「玉子焼、玉子焼。」と自分からほのめか

すようなことを云ったりしたのである。けれども、はつきりしたことではないので、私は彼に向って抗議を申し込むことは控えていた。ある日私が休み時間に、忘れてきたボールをとり教室にもどると、人気のない教室の中で彼が私の机の上に屈み込んでいた。そばに行ってみると、彼は私の読本を机の上にひろげて、その挿画にクレヨンで出鱈目なぬり画でたらめをしているのであった。私はとうとう現場を押さえたのである。けれども驚いたことには、彼は私に見つけられたことあざけに対して、少しもひるむ色を見せなかった。反ってまざまざと嘲りの色を満面に浮かべて私を見た。私はそのとき子供ながらにぞつとした。彼の眼色は私に対する悪意で燃えていたから。けれども、その後は彼も私に対してわるさをし

なくなつた。私はいまだに彼がどうして私に対してあんな真似をしたのか、というよりは敵意を抱いたのか見当がつかないのである。(ずっと後になつて私は、ある新聞記事に「××首相はきょうは夕食に灘の生一本でまぐろのさしみを食べた。」と書いてあるのを読んだとき、なんとつかず彼のことを思い出した。もとより彼が成長して新聞記者となり、その記事を書いたというように想像したわけでもなかったが。まぐろのさしみが私の玉子焼をれんそう聯想させたのかも知れない。)赤犬は、いや、あいつは私が見覚えのある眼色で凝つと私を見つめた。私は子供のとき教室でこの眼を見たときの感情が、自分のうちに甦よみがえるのを感じた。あいつはかつて私の新しい雑記帳をよごしたように、いままた私とメ

リーの生活にけちをつけにやってきたのだろうか。あいつはあのときのように満面に敵意を浮かべて唸り声をあげた。「お前のよ
うな奴がいるから、世の中が住みにくくなるのだ。」私はその唸
り声に打ちひしがれそうになった。同時に私の心にはじめてはげ
しい憤りがこみあげてきた。どこやらの諺にも云うではないか。

「女房と城と犬とは他人に貸すな。」と。私はあいつが私に向けて投げつけた言葉を、そのまま熨斗のしをつけて返上してやろうかと思つた。けれども私にはそれが出来なかった。ひとに向つてそんな言葉を云うほどならば、しつぽを巻いて退却した方がいい。私は前にすすめず後にもひけない状態で、あいつの前に立っていた。私は自分が全身すきだらけであることを感じた。いま若しあいつ

が飛びかかってくるならば、私はのだ笛を噛みきられることだろう。

私は眼がさめた。私は全身にびっしり寝汗をかいていた。危
いところだったと私は思わず心の中でつぶやいた。夢の中で白犬
になった自分の姿は、眼がさめてからも、私の眼にありありと残
っていた。これがいわば自分を客観的に見たということになるの
ではなからうかと私は思った。客観的に見た「私」なるものは、
どうしてなかなか可愛げのある代物であった。主観的反省では、
私はいつも ほくじゅう 墨汁でもすすするような自己嫌悪を味わうのであつ
たが。私には夕方のことも夢のように思われたが、それは夢でな
い証拠には、私の掌には繃帯が巻かれてあった。雨戸をくると、

外はもう明るかった。庭に出て、メリーの小屋の前にゆくと、私の足音をききつけて、メリーは小屋から出てきて、私の足に軀をこすりつけた。私はそこにしゃがんで、メリーの頸を抱きよせ、その眼差しに見入りながら、自分の頭が妄想もうそうから洗われていくのを感じた。

メリーのおなかは日ましに膨ふくれてきた。同時に乳房も膨ふくれてきて、ちゃんと乳首が出来てきた。試みに乳首を絞しぼつてみると、白いお乳がじわじわと、わき出すように出てくる。かるくおなかに掌をあてると、なかの仔どもの動くのが、こちらの掌に伝わってきた。メリーの眼はもうすっかり母親の眼になっていた。その眼

は、「ね、わかりますか。」と私に問いかけているように思われた。

私はメリーを運動に連れ出すことをやめた。メリーの動作は目に見えて鈍^{にぶ}くなってきた。なにをするのもけだるいといった様子で、庭先の陽あたりのいい場所に、ただぐったりとして寝ころぶようになった。お婆さんは不憫がつて、そういうメリーのおなかをそつと撫でてやったりしていた。そうされると、いくらか切なさ^さが緩和されるらしく、メリーは眼をほそくして喜んだ。

「なんだか、孫でも産まれるような氣持がします。」

とお婆さんは云った。

私はメリーの産室には、離れの土間をあてることにした。私は

また果物屋から林檎箱をわけてもらって、それで産^{うぶどこ}床をこしらえた。

離れの前の柿の実があらかた色づいた頃、メリーは無事に仔どもを産んだ。仔どもは五匹で、牡が二匹で、牝が三匹であつた。被毛はみんなメリーに似ていた。

メリーの表情には、はじめて母親になつた喜びが輝いていた。お婆さんもほつとしたし、私もほつとした。

その後、仔どもはみんな順調に発育している。仔どもがそろつて互いにもぐりっこをしながら、メリーの乳房にとりついているところは、なんとも云えず可愛い。掌のうえに載^のせてやると、険^け難^{んのん}がつて鼻をくくんいわせる。その様子はまるで人間の子供

が、「もういい。もういい。」と云っているように見える。

メリーは仔どもに乳を与えながら、誇らしげに私の顔を見上げる。その眼は私に向い、「ね、みんないい仔でしょ。」と自慢しているように見える。

こないだ、お婆さんの孫達が遊びにきたが、そのとき持参のカメラで、私がメリー達と共にいるところを写真にとってくれた。送ってくれた写真を見ると、メリー達のそばに、まぬけづらをした人間が写っていて、それはどうやら私のようであった。それこそ客観的判断の見本かも知れなかった。けれどもその写真を見て、私はチャップリンの「犬の生活」という古い映画のことを思い出した。その映画が上映されたのは、私がごく幼い頃のこと、私

はその映画を見たようにも思うけれど、あるいは見なかったのかも知れないのだ。私はその映画がどういう筋書のものであったかも覚えていないし、またどんな場面があったかも覚えていないのである。けれども、私はその映画の一枚のスチールを見ていて、それを記憶しているのだ。それはれいの浮浪者の扮装ふんそうをしているチャップリンが一匹の野良犬とならんでいる写真なのだ。その後も私はずっとその写真のことを、なんとなく忘れずにいる。筋書も覚えていない、あるいは見なかったのかも知れない映画の一枚のスチールを。「犬の生活」というその題名と共に。

青空文庫情報

底本：「落穂拾い・犬の生活」ちくま文庫、筑摩書房

2013（平成25）年3月10日初版第1刷発行

底本の親本：「小山清全集」筑摩書房

1999（平成11）年11月10日増補新装版第1刷発行

初出：「新潮 第五十二巻第二号」新潮社

1955（昭和30）年2月1日発行

入力：kompass

校正：酒井裕二

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬の生活

小山清

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>